

平語  
和歌

絵本亀の尾山

上





平語 あかんうめのこと  
和歌 繪本亀尾山序

源のちがまをたぬく一紙にあらはるる  
心法師の婦人の平氏昔物語  
ありく一紙に山鳥の芥柄を  
朽虫海の中におく和歌の法  
教くを繪りて傳へてある



山の端り

かど先了

月夜

うとゆれて

春ふま

言ふ

白

梅

うね

卯の初吉

延享四年

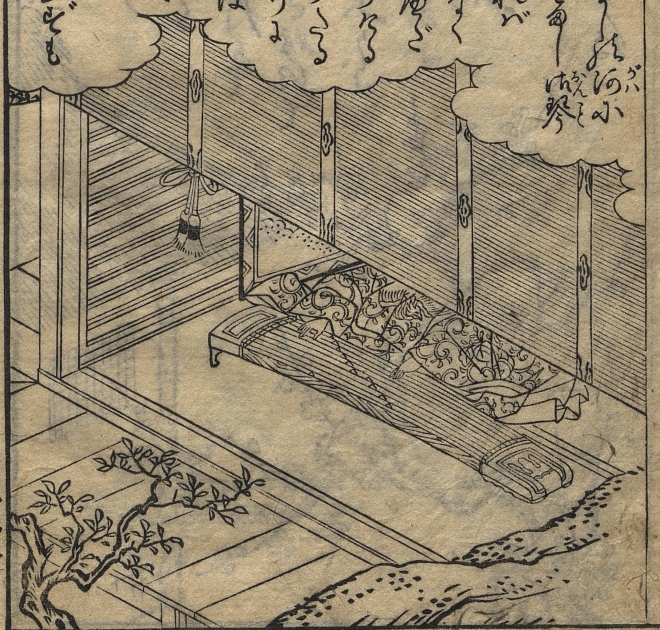
深藏



亀上二

世<sup>よ</sup>深<sup>ひ</sup>そて<sup>ん</sup>の<sup>じ</sup>ぶ<sup>ん</sup>と<sup>の</sup>形<sup>かたち</sup>一<sup>いつ</sup>なり  
 みる人<sup>ひと</sup>撰<sup>せん</sup>者<sup>しや</sup>乃<sup>の</sup>微<sup>あや</sup>言<sup>ごころ</sup>を<sup>こ</sup>汲<sup>み</sup>て<sup>き</sup>了<sup>り</sup>  
 まんいれ

清見東の天玉うねる河小  
 幸しと所ん流を命一  
 と弾ト多ひされが  
 神女トこともなぐ  
 まいへぬ長き屋ご  
 たてて飛んざりや  
 成層よりとらうと  
 昆侖の玉はまはりよ  
 切やこれきまは  
 六人の世女ありと  
 み色て  
 し女子をあらむども



巻上二

うゝ動成  
 ねらあさびすも  
 そのかゝと  
 やまなうま  
 なをとり  
 龍をん  
 六人の  
 をらり  
 ま  
 きの  
 何らの  
 ち先  
 とぞ





角上三





無湯の屑をそのころ  
 上君所程と身小  
 中一居々々が  
 男をすくば忠堂ふ  
 たまらるる居きす  
 りるををむまれて  
 悔やと泣て忠堂  
 とうやどよ  
 いもふねふい  
 ぬらふさう  
 と連がしとちりたれが

亀上ノ四



帝うら奉せまひて  
 幸ふりたて  
 中一いり  
 せよ  
 うくろむばれらう  
 おのがふとす  
 そらして十二の  
 なは耐まぬり十八  
 左衛門のせけよ  
 是をん大相ほや  
 おごり一活登  
 たり



今更のんまはらんうひまき  
 花山殿花山殿是非と  
 中納言重範の  
 珠ま志くれば  
 変なりういふ  
 重範の心のかた  
 かく志あこ  
 ぬきたれども  
 ぬくはれども  
 重範まはれ  
 て何ぞか  
 水のこぼ  
 離別たれば

亀上ノ五



うほさの  
 すに秋風  
 結ばれながら  
 重範の情さると  
 かすりもあひて  
 之は方とあらまひぬ  
 ぬくはれぬ  
 うこもあらぬ  
 うはせ貝  
 ぐさめて  
 おしよ  
 とま



使大寺定定つ  
 大将と家慶の  
 こ弟と色て  
 懐のゆまのり  
 大細を  
 碎浪  
 山より  
 さらさらり  
 まひ  
 て

龍上ノ六



そけしき  
 何いよの中細を  
 顯長に下として  
 洗のりしるる  
 兼平にゆ  
 龍  
 龍まはたて  
 おりよつね  
 形もかくや  
 林はさしき  
 顯長は  
 よの中ふりきとせぬれば  
 くらこもも  
 今をわしは  
 おののそまは





作友云来能清

中人よなき人哉

恋まらりてうりてめは

作らりよつきて

かりひきや

婦のなき程よ

一敷履て

雲乃と人ぬ

月とんとは

まはら空

あゝあろり

石漕浦せ

萬五十六



汁を

作ゆりわらざり

夕れはひや

去らきこと

かりひてあそ

さんせい

法は法先々

ありき法に

浦はうきあま

お四苦せ

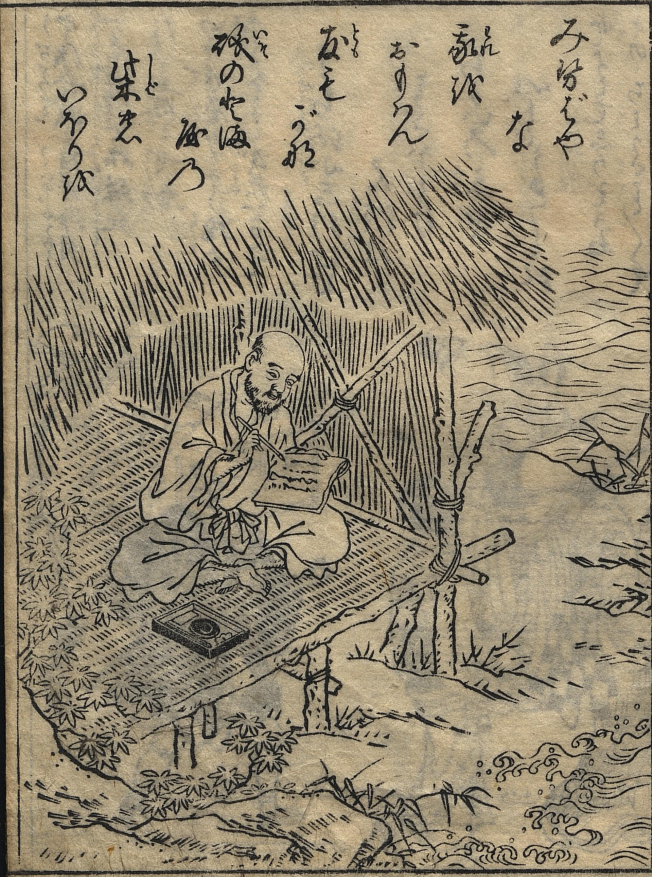
満酒を

人あ



龍舟成親を  
 けしきりて  
 優寛ひとり鬼思ふ  
 一ぬふのここれぬ  
 僧形わいずりて  
 泣かす一先ども  
 ういぞれきやうくと  
 本れ葉あり一を  
 すこくふふり  
 れりてふり  
 いうせんや  
 少一海らび  
 事

龍上ノ二



みつらや  
 な  
 龍次  
 おりん  
 なも  
 ぶね  
 秋のや海  
 海乃  
 栄志  
 つらう瓜

うしろ合戦は筒井浄明  
 一葉は作と始珠死  
 たふ心は明春  
 つとて肩をのり橋  
 信よまがくま老とて  
 うら河小志川ひと  
 足踏は  
 ろこやとり  
 ちうろあぢ  
 せいごうぢり  
 中よとてありどもね  
 そのちらとていづく



電上十一

おはくされ  
 教政平等段の  
 芝は庭とてきて  
 自害するとも  
 煙末の花  
 ちんちん  
 身れなる  
 われ  
 ちんちん





始に政化鳥と稱  
 手抱とありり  
 家と源とあり  
 風雅成尼と  
 一年阿の先のまを  
 みる時月とあり  
 に宿女はつとく

龍上ノ十三



けきとありやめ  
 あつとあり  
 海とありとあり  
 たりあり  
 しみふれか  
 治の岩とあり  
 水とありして  
 つとあり  
 阿や先と  
 せんとあり  
 まつとあり



兼安四年春より  
 甚の雨申す  
 又早まて人氏  
 今一と  
 あけきなる小  
 山に推し傍形  
 沈意丹漱して  
 いのいせ  
 くれび天  
 織りうき  
 くりり又雨  
 三日三夜  
 四海よりい  
 まくらなる小  
 後意法師



今一と  
 てかろ  
 龜の  
 上よ  
 四岩流  
 こひは  
 雲か花れ  
 雨とありわろ  
 雲よを何らなる  
 沈意は  
 天てく次光のまこり  
 くれいも  
 石火とよか忍乃  
 かりは常こる那



巻上十五



平家朝臣  
落ゆくこれ  
阿の古女なく  
はまきこまひき

住るま  
おま  
うとま

神  
あまこ

いその  
雲風



